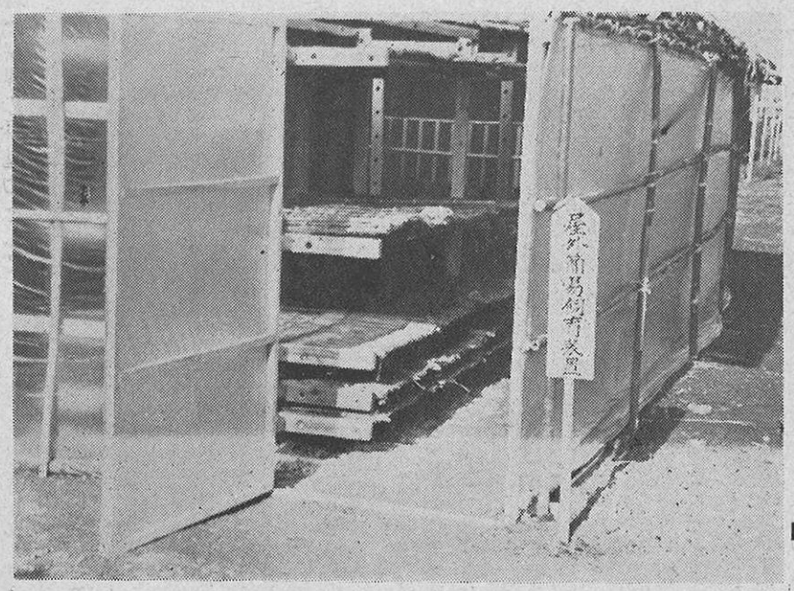
■これからの農業経営は、耕地の立地條件をすなおに生かし、労力を上手に配分して無理がなく、常に新しい技術を研究し応用している経営でなければならない。

★本県の養蚕収入は平均反当繭22貫で、金額にして約33,000円となつて水田の反収に匹敵し、一般畑作収入にくらべると6割の増収である。このように畑作としてはかなり重要な役割を果しているにも拘らず、依然として伸びナヤミの状態を続けている。これは、今の養蚕が営農から遊離した経営であるためであろう。

■「新養蚕」とは、これまでの我流の養蚕を打ち破るために、桑の作り方をかえ、蚕の「簡易飼育」を徹底的に取入れ、更に畜産と組合わせて、反収10万円を確保できる企業性のある立体的な営農型態をつくりあげるのが目的である。



天覧を賜つた簡易飼育のビニールハウス……★

（昭和33年4月14日・熊本県蚕種協同組合にて）

■好成績の簡易飼育

家の中で蚕を飼う同屋養蚕や、多額の蚕具を要する養蚕は、営農の中に簡単にとり入れる事ができない。ところが屋外にビニール・ハウスをつくり、その中で、手持の材料をつかつて、簡単に蚕を飼う事ができる。

■この方法でやれば、今まで繭1貫を生産するのに3.3日かゝつていたものが、僅か2.3日、反当では73日を51日でやることができる。

熊本県蚕業試験場の新しい姿

養蚕は、すでに昔のやり方からうんと進歩してきました。そこで、この新養蚕の方向に副えるよう、蚕業試験場では、これまでの仕事に、新しく、「経営研究」を加えて、単なる技術研究だけでなく、農業の経営と養蚕をどう結びつけるかという試験研究に主力を注いでいます。

仕事のあらまし

黒石桑園のうち、一町歩を利用して、桑園三反歩、普通畑七反歩、乳牛・役牛各一頭、可働人員は農夫二人（夫婦）、研究生一人、助手一人計四人の農業経営での養蚕経営を工夫研究し色々と改善を図ると共に、その成績を、別に県下二十五カ所に設けた実験農家の成績と併せてこれを分析し、蚕業指導所の営農指導指針としています。

なお、黒石においては次の事をテーマに研究しています。

①畜産と組合せた場合の飼料関係

②養蚕、畜産、普通作の土地及び労働生産性

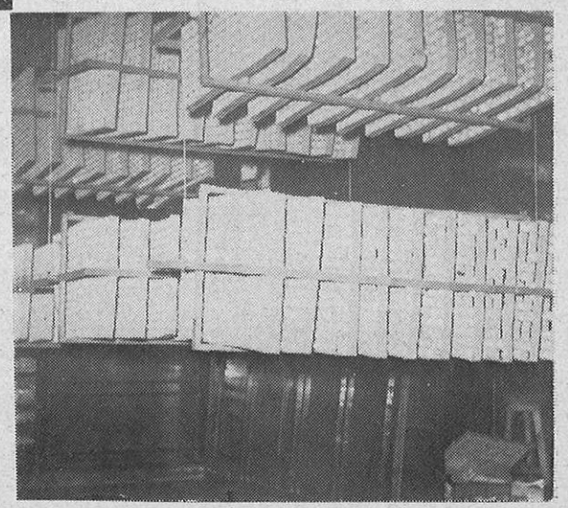
③省力栽培及び飼育法を工夫し、営農におけるつながりを研究する。

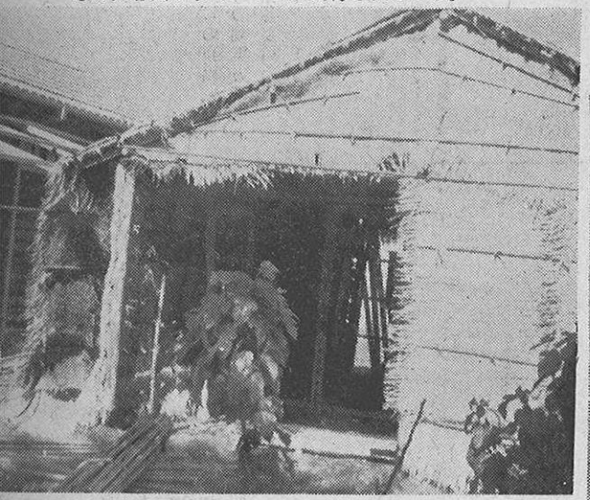
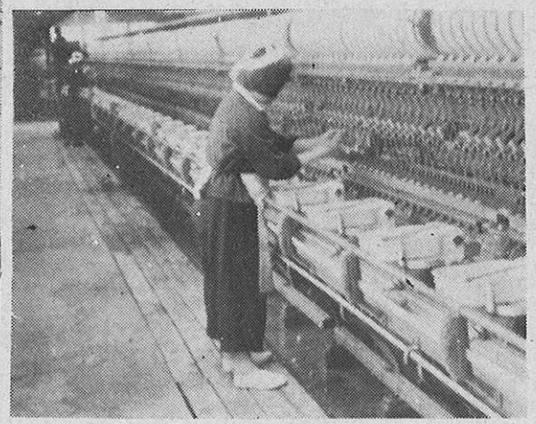
↑グラスダウンによる半草生栽培は、表土の流失防止と干バツ防止、除草・中耕労力の節減ができる。

←エンバクとベツチの混播を冬期間（9月～4月）桑園に間作し、家畜飼料に……そして桑園に還元する。

↑敷ワラ又は敷草はグラスダウンによる半草生栽培と同様の効果がある。

↓簡易飼育（ビニールハウスにむしろをかぶせてある）春蚕から40グラムが飼育されている。



↑回転簇による上簇改善。上簇はこの回転簇により繭の質は向上し、繭価は高くなる。

↓自動繰糸機で生糸の生産費は下り、経営合理化となる。